三菱電機カペラ・エレクトラ

第6回演奏会

Edvard Grieg (1843-1907)

と　き　2009年8月2日（日）14時開演

ところ　和歌山ビッグ愛　大ホール

主　催　三菱電機黒潮会コーラス部

賛助出演　和歌山県立桐蔭高等学校音楽部

ごあいさつ

本日は三菱電機黒潮会コーラス部「カペラ・エレクトラ」の第６回演奏会にお越しくださいまして誠にありがとうございます。

当団は三菱電機株式会社和歌山製作所（現 冷熱システム製作所）の社内コーラス部として１９８５年に発足以来、和歌山では数少ない職場合唱団の一つとして、特に中世マドリガルなどの小編成無伴奏合唱曲を主要レパートリーに、合唱活動を続けてまいりました。

現在では、社外からのメンバーが増え、パワーアップして今日に至っております。

本日の演奏会は、２年前の２００７年に没後１００年を迎えたノルウェーの作曲家グリーグの合唱作品を集めたステージをメインに、定番のマドリガルや木下牧子氏の合唱作品など５つのステージを企画しました。第３ステージには賛助演奏として県立桐蔭高等学校音楽部のフレッシュな皆さんをお招きし、演奏会に花を添えていただくことになりました。

満足のいく演奏ができるかどうか不安はありますが、本日足をお運びいただいた会場の皆様の心に届く演奏ができますよう精一杯歌う所存です。このひとときを私たちとご一緒に楽しんでいただければ何よりの幸せでございます。

なお、今回の演奏会の開催に当たりましては、多数の方々からご支援をいただきました。心からお礼申し上げます。

三菱電機黒潮会コーラス部「カペラ・エレクトラ」 部長　川井　治

カペラ･エレクトラのご紹介

1985 年　三菱電機(株)和歌山製作所（現 冷熱システム製作所）内の社内コーラス部として発足。以降、社内のレクリエーションイベント等で合唱演奏する。
1989 年　第 22 回和歌山県民合唱祭に出演。Morley のマドリガルを歌って社外初舞台。
1990 年　第１回演奏会を和歌山ルーテル教会で開催。イギリスのマドリガル、クリスマスキャロル他を演奏。この頃から、団名を「三菱電機カペラ・エレクトラ」と名乗る。
1991 年　第２回演奏会を和歌山ルーテル教会で開催。映画音楽、イタリアのマドリガル他を演奏。
1992 年　第３回演奏会を和歌山ルーテル教会で開催。フランス、イギリスのマドリガル他を演奏。
1993 年　第４回演奏会を和歌山ルーテル教会で開催。ラッソ、８人のジョンのマドリガル他を演奏。
2004 年　第５回演奏会を和歌山ビッグ愛で開催。山田耕筰作品、イギリスのマドリガル他を演奏。
2009 年　本日、第６回演奏会を和歌山ビッグ愛 大ホールで開催。

第 39 回 和歌山市楽しい歌声の会 2007 年 9 月 2 日

指揮者紹介　［吉田 武司］

１９８８年三菱電機入社。配属先の和歌山製作所で、学生時代に指揮者仲間であった同窓の先輩瀬尾忠生氏との運命的な再会があり、共同で現在のカペラ･エレクトラの演奏スタイルを築く。幼少時には故郷の丹波篠山でピアノを習い、大学では音響学ならぬ機械振動学専攻の傍ら、神戸大学グリークラブに所属し、斉田好男氏から指揮法のいろはを教わる。好みの音楽ジャンルは古典派とロマン派。日頃は、自分の選曲に文句も言わず優しく賛同して歌ってくれるカペラ･エレクトラのメンバーにとても感謝している。

Photo: ルンダルネ国立公園(ノルウェー) ©Wikipedia

プログラム

第１ステージ　English Madrigals（イギリスのマドリガル） から

「Farewell, dear love（さようなら、愛するひと)」　作曲 R. Jones
「Weep, O mine eyes（涙せよ、わが瞳)」　作曲 J. Bennet
「The silver swan（銀色の白鳥)」　作曲 O. Gibbons
「See, see the shepherds' queen（ご覧、ご覧、羊飼いの女王様を)」　作曲 T. Tomkins
「Adieu, sweet Amaryllis（さようなら、いとしいアマリリス)」　作曲 J. Wilbye

第２ステージ　Attractive Selections － 愛唱歌ステージ

「まりと殿様」　作詩 西条八十　作曲 中山晋平　編曲 増田順平
「緑の森よ」　作詩 緒園涼子　作曲 F. Mendelssohn
「Ständchen（小夜曲)」　作詩 O. Wolff　作曲 A. L. Marschner
「秋のピエロ」　作詩 堀口大学　作曲 清水脩
「埴生の宿」　作詩 里見 義　作曲 H. R. Bishop
「サリマライズ」　作詩 森田久男　オランダ民謡

第３ステージ　和歌山県立桐蔭高等学校音楽部のステージ

Seven Songs of Nonsense から　作詩　谷川俊太郎　作曲　鈴木輝昭
「Multiplication（かけざん)」　訳詩　William I. Elliotto、川村和夫
「Newspaper（しんぶん)」
ふくろうめがね から　作詩　くどうなおこ　作曲　木下牧子
「ほたるたんじょう」

合唱：和歌山県立桐蔭高等学校音楽部　指揮：中村淑子

(((休憩)))

第４ステージ　アカペラ・コーラス・セレクション から

「サッカーによせて」　作詩　谷川俊太郎　作曲　木下牧子
「おんがく」　作詩　まど・みちお
「さびしいカシの木」　作詩　やなせ たかし 編曲　吉田武司
クラリネット独奏 星田弥栄
「ロマンチストの豚」　作詩　やなせ たかし
「うたをうたうとき」　作詩　まど・みちお
「鷗（かもめ)」　作詩　三好達治

第５ステージ　グリーグの合唱曲 から

「Ved Rondane, op.33 No.9（ルンダルネにて)」作詩 A. Vinje 作曲 E. Grieg 編曲 T. Caplin
「Ave, Maris stella, EG150（めでたし海の星よ)」　詩 Latin hymn
「Velsignede morgen, op.23 No.25（神聖な朝)」　作詩 H.Ipsen
「Våren, op.33 No.2（過ぎ去った春)」　作詩 A.O.Vinje　編曲 T.Beck
ソプラノ独唱 吉田陽子

アンコール・ステージ

「Amen」　作曲 J.Rutter
「Second Amen」　作曲 J.Rutter　採譜 吉田武司
「知床旅情」　作詩／作曲　森繁久弥

司会： 山口美和

―――― 曲目解説と歌詞 ――――

文責：吉田 武司 (2009-7)

１．イギリスのマドリガルから

■時代は安土・桃山から江戸前期にかけての動乱期、キリシタン宣教師とともに我が国に渡った後期ルネサンス期の宗教音楽の断片は、我々の祖先の耳にどのように届いたのでしょうか。
■同時期のマドリガル、マドリガーレ、シャンソン・・・と、カペラ・エレクトラの十八番として欧州各地のレパートリーをこなしてきましたが、その時代の音楽の内面に踏み込むにつけ、その異境の地の、かつ時代を越えた自由奔放で悩み多き「人間」との出会いにわくわくして小躍りしてしまいます。形式は古いですが中身は骨董品ではないのです。その思いは、本日の演奏で皆様にお伝えできるでしょうか。
■曲ごとに歌唱メンバーを換えて演奏しますので、下記の歌詞をご覧になりながら聴き比べてください。
■もちろん本日演奏する５つの世俗曲（当時の歌謡曲、ポピュラー音楽）はいずれも、三百年の鎖国の後、明治以降に初めて日本人の耳に触れたものばかりです。

「Farewell, dear love（さようなら、愛するひと）」

さようなら、愛するひと、
御身は去らねばならないのだから
私の両の目が語る、私の命が終りかけていると
　いいや、私は決して死なぬ
　御身を垣間みられるうちは
　辛いことも多かろう
　彼女が去ってしまっても
辛いことも多かろう、だが私は恐れはしない
それなら彼女を行かせてしまおう、私は構わぬ

さようなら、さようなら！
これが本心と気づいたのだから
御身の愛を求めて、このうえ時を費やしはしない
　それでも私はよそで探すだろう
　彼女を見つけられぬものかと
　彼女に命じようか、行ってしまえと？
　そうしたら一体どうなるだろう？
彼女に命じようか、行ってしまえと、容赦なく？
おお、だめ、だめ、だめ、だめ、だめだ、とてもできぬ

●ロバート・ジョーンズ「ソング、もしくはエア第１集」(1600)収録

「Weep, O mine eyes（涙せよ、わが瞳）」

涙せよ、わが瞳、泣きやむな
ああ、おまえの高潮もここまでかに私には思える
おお、いったいいつおまえは
その中で私が溺れ死にできるほどの高波となってくれるのだ？

●ジョン・ベネット 「４声のマドリガル」(1599)収録

「The silver swan（銀色の白鳥）」

生きている間、歌うことのなかった銀色の白鳥は
死が近づいたとき、沈黙をやぶって声を出した。
アシの茂った岸辺に胸をもたせかけ、
はじめての、そして最後の歌をうたい、
もうそれ以上は歌わなかった。
「さようなら、すべてのよろこびよ。おゝ死よ、私の目を閉じにきておくれ。
白鳥よりガチョウの多い、賢者より愚者の多い世なのだから。」

●オルランド・ギボンス「マドリガル第１集又は５声のモテット」(1612)収録

「See, see the shepherds' queen（ご覧、ご覧、羊飼いの女王様を）」

御覧、御覧、羊飼いの女王様を
麗しのフィリス、緑の服に身を包み（ファ、ラ…）
羊飼いたちが彼女を家へ連れていく
笛吹きながら、歌いながら（ファ、ラ…）
そうしたら、列を作って踊ろうよ
進みながら唄おうじゃないか（ファ、ラ…）

●トマス・トムキンズ 「３、４、５，６声のソング」収録

「Adieu, sweet Amaryllis さようなら、いとしいアマリリス」

さようなら、いとしいアマリリス
あなたは別れることを望んでいるのだから、
　おお、なんと過酷な知らせか、
　私にはなんの別れの言葉もない。
あなたと別れる前にもう一度だけ、
アマリリス、いとしい人よ、さようなら、と。

●ジョン・ウィルビー「イギリスマドリガル第１集」(1599)収録

２．Attractive Selections － 愛唱歌ステージ

■メンデルスゾーンの邦訳版をはじめ、比較的穏やかな曲想の愛唱歌集を取り上げました。また本日唯一、紀州カラーを出しているご当地ソング「まりと殿様」は、意外と当団のメンバーが得意に思っている曲です。前回の第４回演奏会以来、久しぶりに増田順平先生の編曲で歌います。
■「緑の森よ」はメンデルスゾーンの作品 59-3「森への別れ」の原曲に、日本人の作詞家である緒園凉子（おそのりょうし）が日本情緒を詩にした唱歌です。次回演奏会には、ドイツの森への思いを原曲で歌ってみたいと考えています。
■「埴生の宿」と「サリマライズ」は当団のみならず、全国で愛されている曲です。ダイナミクスの妙を出してみます。
■最近ようやく各パートの人数が３～４名になり曲選択の自由度が増してきたこともあって、少し余裕が出来てきたところで、このステージでは男声合唱を取り出して楽しむことにしました。カペラ・エレクトラの男声コーラスは初公開なのですが、普段内声に徹しているテナーが最も高い声部と旋律を受け持つことに対し、混声合唱団の男声部特有の‘戸惑い’と‘ときめき’が入り混じります。「小夜曲」と「月光とピエロ」の２曲を暖かく見守ってください。

Photo: 和歌山城天守閣（和歌山）　©T.Yoshida

「まりと殿様」（西条八十　詩）

てんてんてんまり　てん手まり
てんてん手まりの　手がそれて
どこからどこまで　とんでった
垣根をこえて　屋根こえて
表の通りへとんでった　とんでった

表の行列　なんじゃいな
紀州の殿様　お国入り
きんもんさき箱　ともぞろい
おかごのそばには　ひげやっこ
毛槍をふりふり　ヤッコラサの　ヤッコラサ

てんてんてんまり　てん手まり
はずんでおかごの　やねの上
もしもし紀州の　お殿様
あなたのおくにの　みかん山
わたしにみさせて　くださいな　くださいな

おかごはゆきます　とうかいどう
とうかいどうは　松なみ木
とまりとまりで　日がくれて
一年たっても　もどりゃせぬ
三年たっても　もどりゃせぬ　もどりゃせぬ

てんてん手まりは　殿様に
だかれてはるばる　たびをして
きしゅうはよいくに　日の光
山のみかんに　なったげな
赤いみかんに　なったげな　なったげな

「緑の森よ」（緒園涼子　詩）

緑の森よ　我は歌わん
汝（なれ）はこよなき我が憩いと
長き冬の日　嵐にめげ
梢（こずえ）は寒く　雪を呼べど
春風吹けば　蘇（よみがえ）りぬ

緑の森よ　我は歌わん
汝はこよなき我が憩いと
小暗き森の　樹々は繁り
強き真夏の　陽（ひ）はおごれど
梢を延べて　木陰（こかげ）なしぬ

「Ständchen(小夜曲)」（O.ヴォルフ　詩）

なぜあなたはそんなに遠くにいるのですか
私の愛しい人よ
星は穏やかに輝き
月は静かな円舞を終え傾きかけています
おやすみなさい　私の愛しい人よ

波が静かな音をたて
あなたもまた去ってしまいました
私の愛しい人よ
私は森の中を静かに彷徨って
月明かりに喚いています
おやすみなさい　私の愛しい人よ

心の中に生まれるのは
苦くそして甘い痛みなのです
私の愛しい人よ
その痛みに私は喜びまた傷つき
あなたに思いを馳せてしまうのです
おやすみなさい　私の愛しい人よ

「秋のピエロ」　（堀口大学　詩）

泣き笑いして　我がピエロ
秋じゃ　秋じゃ　と歌ふなり
Oの形の口をして
秋じゃ　秋じゃ　と歌ふなり
月のようなる　おしろいの
顔が涙を　ながすなり
身過ぎ世過ぎの　ぜひもなく
おどけたれども　我がピエロ
秋はしみじみ　身にしみて
真実　涙を　流すなり

「埴生の宿」（里見 義　詩）

埴生(はにゅう)の宿も　わが宿
玉の装(よそい)　うらやまじ
長閑(のどか)なりや　春の空
花はあるじ　鳥は友
おゝ　わが宿よ
楽しとも　たのもしや

書(ふみ)読む窓も　わが窓
瑠璃(るり)の床も　うらやまじ
清らなりや　秋の夜半(よわ)
月はあるじ　虫は友
おゝ　わが窓よ
楽しとも　たのもしや

「サリマライズ」（森田久男　詩）

わがもと　はなれ　さりゆける
なつかしき　友よ
今　ふたたび　かえりきたる
われらの　もとへ
ああ　なつかしきかな
いざ　うたわん
うるわし花は　野に山にみち
小鳥も　歌う
小川の　せせらぎも楽しげに
われらと　歌う

3．和歌山県立桐蔭高等学校音楽部のステージ

■谷川俊太郎の詩集「よしなしうた」を、川村和夫が英訳した「Songs of Nonsense」から２曲を選びました。歌詞の英語に苦戦し、鈴木輝昭の独創性あふれる繊細なハーモニーとリズムに悩まされながらも、彼の音楽世界に魅了されて演奏いたします。
詩が内包する無機質な情感と不条理なヒューマニズムの不思議な世界が表現できればと願います。（桐蔭高校音楽部）
■本日の皆様のステージが、コンクールに向けた良い糧となるよう期待しています。（ｶﾍﾟﾗ･ｴﾚｸﾄﾗ・吉田）

4．木下牧子「アカペラ・エチュード」から

■２００６年から翌年にかけて取り上げた曲集です。日本語で歌う現代クラシックにこだわったらこの曲になりました。技能と表現力を鍛える上でもとても取組み甲斐のある曲集だと思います。第３ステージで歌われた「ほたるたんじょう」から木下牧子作品が続きます。先ほどの心地そのままに、流れを引き継いでお楽しみください。
■作曲の妙に加えて、詩がまた良い。“おんがく”が見えずとも実践できる喜びを噛み締めながら、練習会場に集まればみんなで“こころひとつになって”青春を感じ（思い出し）、いつも“微笑みながら立って”歌っているメンバーを見て、今日このステージで奔放に歌うことのできる“自由は(つひに)彼らのものだ”と感じながら、日常でふりかかる種々の試練に対して“力いっぱい蹴り返”しているそれぞれの生きざまがとても明るく見えてなりません。楽しき哉人生。
■「うたをうたうとき」は女声合唱で歌います。また、「さびしいカシの木」は曲にクラリネットを挿入してみることにしました。第２子の誕生が近いソリストには少々無理強いしてしまったかも知れません。粒揃いの大曲なので、このステージでへとへとになるかも知れませんが、どうぞ最後までお聴きください。

「サッカーによせて」　（谷川 俊太郎　詩）

けっとばされてきたものは　けり返せばいいのだ
ける一瞬に　きみが自分にたしかめるもの
ける一瞬に　きみが誰かにゆだねるもの
それはすでに言葉ではない

泥にまみれろ　汗にまみれろ
そこにしか　憎しみが愛へと変わる奇跡はない
一瞬が歴史へとつながる奇跡はない

からだがからだとぶつかりあい　大地が空とまざりあう
そこでしか　ほんとの心は育たない
希望はいつも　泥まみれなものだ
希望はいつも　汗まみれなものだ
そのはずむ力を　失わぬために

けっとばされてきたものは　力いっぱいけりかえせ

「おんがく」　（まど・みちお　詩）

かみさまだったら　みえるのかしら
みみを　ふさいで　おんがくを　ながめていたい

目もつぶって　花のかおりへのように
おんがくに　かお　よせていたい

（次ページに続く）

口にふくんで　まっていたい
シャーベットのように広がってくるのを
そして　ほほずりしていたい　そのむねに　だかれて

「さびしいカシの木」　（やなせたかし　詩）

山の上のいっぽんの　さびしいさびしい　カシの木が
とおくの国へいきたいと　空ゆく雲にたのんだが
雲は流れて　きえてしまった

山の上のいっぽんの　さびしいさびしい　カシの木が
私といっしょにくらしてと　やさしい風にたのんだが
風はどこかへ　きえてしまった

山の上のいっぽんの　さびしいさびしい　カシの木は
今ではとても年をとり　ほほえみながらたっている
さびしいことに　なれてしまった

「ロマンチストの豚」　（やなせたかし　詩）

ロマンチストの豚がいた
こころはやさしくおしりはまるく
ほそいひとみをまばたいて
いつもはなをならしていた
　ロマンチストの豚　ロマンチストの豚
　夢みる夜のあこがれに
　みもだえしながらせつなくねむる

ロマンチストの豚がいた
暮らしはひどくて希望もないが
しかしほほえみわすれずに
いつも歌をうたっていた
　ロマンチストの豚　ロマンチストの豚
　夢みる夜のあこがれに
　みもだえしながらせつなくねむる

ロマンチストロマンチストの豚がいた
ある晩背中に翼がはえた
白い翼をはばたいて
豚は空へとんでいった
　ロマンチストの豚からは
　それっきりなんのたよりもない

「うたをうたうとき」　（まど・みちお　詩）

うたを　うたう　とき　わたしは　からだを　ぬぎます
からだを　ぬいで　こころ　ひとつに　なります
こころ　ひとつに　なって　かるがる　とんでいくのです
うたが　いきたい　ところへ　うたよりも　はやく
そして　あとから　たどりつく　うたを
やさしく　むかえてあげるのです

「鷗」　（三好 達治　詩）

つひに自由は彼らのものだ　彼ら空で恋をして
雲を彼らの臥床とする　つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ　太陽を東の壁にかけ
海が夜明けの食堂だ　つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ　太陽を西の窓にかけ
海が日暮れの舞踏室だ　つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ　彼ら自身が彼らの故郷
彼ら自身が彼らの墳墓　つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ　一つの星をすみかとし
一つの言葉でことたりる　つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ　朝焼けを朝の歌とし
夕焼けを夕べの歌とす　つひに自由は彼らのものだ

５．グリーグの合唱作品集

■グリーグは北欧ノルウェーを代表する作曲家で、有名な劇音楽「ペール・ギュント」をはじめとしてノルウェーの民族音楽からの深い影響が見られる作品を残しています。ペール・ギュント組曲や「叙情小曲集」などのピアノ作品は良くご存知でしょうが、意外？と声楽作品や合唱作品を多数書いているのが特徴的です。筆者は今から約四半世紀前に青春の大部分を捧げたグリークラブで、彼の男声合唱曲「故郷への帰還」作品 31 を選んで演奏しました。その好感触が深々と脳裏に残っていたためか、再びその甘美な後期ロマン派メロディに取り組むことになりました。
■歌唱に当たってはノルウェー語の入門書を紐解き、ノルウェー語自体のテキストが日本では余り出版されていないこと、ノルウェーでは未だに２言語が入り混じり国語が統一されていないことなどを初めて知りました。我々日本人にとっては余り馴染みのない言語であると言わざるを得ません。ノルウェー語の母音の発音については、英語やドイツ語など同じゲルマン語派に属する他言語の広狭母音、グリーグ歌曲などの CD 音源、そして前述の文献などを頼りに類推しましたものの、所詮俄か仕立ては否めず、母国の方には意味の解せない奇妙な発音に聴こえるかも知れません。
■ノルウェーの詩人イプセンの詩による「ルンダルネにて」と「過ぎ去った春」は、ノルウェーのいつまでも美しい自然と、巡り来る春への再会の喜び・感謝を歌った旋律で、いずれも歌曲「12 の歌」作品 33 から合唱用に編曲されたものです。オーケストラ伴奏に相当する部分を合唱で受け持ち、ホモフォニックな旋律をソプラノパートと独唱が奏でます。グリーグの作品の中でも最も美しい旋律が、いつまでも皆様の心に残るよう我々の合唱で表現できれば幸いです。
■「めでたし海の星よ」は、グリーグが晩年に残した詩篇作品 74 と並ぶ数少ない宗教作品の一つです。このステージでは唯一、ラテン語による歌詞で歌います。
■「神聖な朝」作品 23-25 は、イプセンの戯曲「ペール・ギュント」の最後の場面で登場する群集の賛美歌です。恋人のソルヴァイ（ソルヴェーグ）を家に残したまま、偉大な者になろうと放浪・遍歴を何年も続けたペール・ギュントは、ペンテコステ（聖霊降臨日）の前夜、今や盲目になってペールの帰りを待ち続けているソルヴァイのもとに偶然たどりつきました。その翌朝、人々が礼拝に向かうときに歌うこの賛美歌を聞いて、ペールは覚悟を決め真直ぐにソルヴァイの待つ小屋に向かいます。戯曲のクライマックスシーンを小編成の合唱で味わってください。

「Ved Rondane, op.33 No.9」

No ser eg atter slike Fjell og Dalar,
som dei eg i min fyrste Ungdom såg,
og same Vind den heite Panna svalar;
og Gullet ligg på Snjo, som før det låg.

Det er eit Barnemål, som til meg talar,

「ルンダルネにて」　（A.ヴィニエ　詩）

今や私は、幼年時代に見た山々や谷を再び見ている。
そして、当時と同じ風が熱き眉を冷やし、
かつてのように雪の上は
黄金の光できらめいている。

私に話しかけるのは幼少期の声、

（次ページに続く）

og gjer meg tankefull, men endå fjåg.
Med Ungdomsminne er den Tala blanda:
Det strøymer på meg, so eg knapt kan anda.

Ja Livet strøymer på meg, som det strøymde,
når under Snjo eg såg det grøne Strå.
Eg drøymer no, som før eg alltid drøymde,
når slike Fjell eg såg i Lufti blå.

Eg gløymer Dagsens Strid, som før eg gløymde,
når eg mot Kveld av Sol ein Glimt fekk sjå.
Eg finner vel eit Hus, som vil meg hysa,
når Soli heim til Natti vil meg lysa.

物思いにふけっているが、それでいて幸福を感じている。
その言葉は、若き頃の思い出と混ざり合い、
ほとんど息が出来ないくらい私に覆いかぶさるのだ。

そうなのだ、雪の下にみずみずしい新芽を見たとき
かつてそうであったように、人生が私の上を流れ始める。
青い空にそびえる山々を見たとき、
私はかつていつも見た夢を今再び見ている。

もう忘れてしまっていたが、その夕日のきらめきを見たときに、
私は一日の苦しみを忘れることができることを。
夜が来るまでに日の光が私の帰り道を照らしてくれるなら、
きっと私は自分を守ってくれる棲家を見つけることができるに違いない。

「Ave, Maris stella, EG150」

Ave maris stella,
Dei mater alma, Atque semper virgo,
Felix coeli porta.

Solve vincla reis,
Profer lumen caecis,
Mala nostra pelle,
Bona cuncta posce.

Vitam praesta puram,
Iter patra tutum,
Ut videntes Jesum,
Semper Collatemur.

Sit laus Deo Patri,
Summo Christo decus,
Spiritui sancto Tribus honor unus.
Amen.

「めでたし海の星よ」 （ラテン語賛美歌）

めでたし、海の星*。（*海の星＝聖母マリアの比喩）
実り豊かな神の母。
そして、永遠の処女、幸いな天の門。

罪人たちのかせを解き放ち、
目の見えない人たちの目を開いて下さい。
私たちの悪を防ぎ、
全ての恵みを祈って下さい。

清らかな命を授けて下さい。
あなたに繋がる道をなだらかにして下さい。
そして、私たちが主イエスに会って、
永遠に一緒に喜べますように。

父なる神に誉れがあり、
いと高きところのイエス・キリストにと、
聖霊に称えがありますように。
三位一体たる神に同じように栄光があらんことを。

「Velsignede morgen, op.23 No.25」

Velsignede Morgen,
da Gudsrigets Tunger
traf Jorden som flammende Stål.
Fra Jorden mod Borgen
nu Arvingen sjunger
på Gudsrigets Tungemål.

「神聖な朝」 （H.イプセン　詩、聖霊降誕祭賛美歌）

聖なるかなこの朝、
神の御声は時もあれ
燃える剣と地を打てり！
地より御空の宮居まで
世継ぎの子らは謳歌せん
神の御国のときの声

「Våren, op.33 No.2」

Enno ein Gong fekk eg Vetren at sjå for Våren at røma;
Heggen med Tre som der Blomar var på, Eg atter såg bløma.
Enno ein Gong fekk eg Isen at sjå frå Landet å fljota.
Snjoen å bråna og Fossen i Å at fyssa og brjota.
Graset det grøne eg enno ein Gong fekk skoda med Blomar;
Enno eg høyrde at Vårfuglen song mot Sol og mot Sumar.

Eingong eg sjølv i den vårlege Eim, som metter mit Auga,
Eingong eg der vil meg finna ein Heim og symjande lauga.
Alt det, som Våren imøte meg bar og blomen, eg plukka,
Federnes Ånder eg trudde det var, Som dansa og sukka.
Derfor eg fann millom Bjørkar og Bar i Våren ei Gåta;
Derfor det Ljod i den Fløyta eg skar, meg tyktes at gråta.

「過ぎ去った春」 （A.ヴィニエ　詩）

また再び冬が逃げ去り、春に時を譲るのを私は見る。
去年花で一杯だったサクランボの木も　また花で一杯だ。
また再び氷が消えて、大地が姿を現すのを見る。
雪が溶けて滝のような水はほとばしり流れる。
緑に萌える草は、また再び花と共に現れ出で、
また聞こえてくる春の鳥たちの声は、陽に、そして夏に向かう。

一日中、春の香りに浸ってわが目をうるおし、
一日中くつろいで春を体一杯に浴びる。
春が私にもたらしてくれるのは摘み取った一輪の花。
祖先の魂が踊り、吐息をついている。そんな風に思える。
だから白樺ともみの木の間には　春には謎があり、
私の削り出した笛の音は、すすり泣くように訴えてくるのだ。

アンコール･･･

■アンコールは本来､その演奏会で最も感銘を与えた曲や秀逸な曲を再び聴衆のリクエストに応じ再度演奏するものですが、近年はプロ・アマによらず予めアンコール用に用意された曲目が聴衆にとっては突発的に（半ば強制的に）演奏されることが多いように思います。本日はその後者に当たりますので、解説をご用意しました。
■アンコール第１曲目は、現代イギリスの売れっ子作曲家兼演奏家ジョン・ラターの「アーメン(第一)」です。メンバーのＯ氏が以前に所属していた合唱団で「歌いそびれたので是非」との、氏の提案で取り上げた曲です。混声８声部、歌詞は「Amen」のみで、演奏時間１分弱の短い曲ですが、集積回路の如く様々な音楽表現、発声及び演奏テクニックが詰まっています。さて、皆様の心の琴線に触れるようなトランジスタ的演奏が出来るでしょうか。
■アンコール第２曲目は、同じくジョン・ラターの「アーメン(第二)」を演奏します。氏のクリスマスキャロル集の CD 音源に収録されていますが、肝心の楽譜はどこを探しても入手できませんでしたため、観念して無理やり採譜して歌うことにしました。なので、もしかしたら我が国初演かも知れません。
■アンコール３曲目の「知床旅情」は、本日お越しくださった皆様とともに歌わせていただきたく、本冊子に挟んでいる歌詞カードをご覧ください。本日は長時間最後までお付き合いくださり誠に有難うございました。またお出合いできますことを楽しみにしております。

メンバー

ソプラノ	坂本 美紀	吉井 万喜子	吉田 香澄	
メゾソプラノ	岡田 賀士子	星田 弥栄	吉田 陽子	
アルト	河嶋 愛子	楠本 徳子		
テノール	岡田 成人	川井 治	津田 雅弘	成川 洋司
バリトン	田中 彰	橋野 正樹	吉田 武司	
バス	楠本 能正	高橋 浩樹		

♪

三菱電機カペラ・エレクトラのホームページでは、当団の最新活動状況を掲載しています。
http://www5a.biglobe.ne.jp/~dekansho/index.html

第 29 回和歌山市コーラスフェスティバル 2008 年 11 月 16 日

賛助出演　和歌山県立桐蔭高等学校音楽部のご紹介

本校は、今年で和歌山中学・桐蔭高等学校の創立１３０周年を迎える伝統校であり、文武両道をモットーに日々クラブ活動に励んでいる生徒が多くいます。３年前には桐蔭中学が併設され、中高一貫校として歩みはじめました。

音楽部は、昨年度までの混声合唱から、今年は再び女声合唱として活動しています。夏休みには、筋肉を増強すべく校内周辺を走り、体力を鍛え、声を磨く努力を重ねています。毎年行われる定期演奏会ではミュージカルに取り組み、「歌い、踊り、芝居する」舞台表現を楽しんでいます。

本日は、今年度のメンバーによる初めての舞台発表の機会ですので、精一杯歌わせていただきます。

ソプラノ	前谷 有香	中山 加菜恵	吉田 香澄	東 優花
	貴志 歩美 (中学)	小池 舞 (中学)		
メゾソプラノ	松本 尚美	片山 梨沙子	中松 理紗子	東山 恵理芳
アルト	明楽 直樹	山路 真由	畑下 友紀	
顧問・指導	中村 淑子			